

「1.5度」で北極の氷維持を

石炭や石油といった化石燃料の使用増などに伴い、二酸化炭素(CO₂)をはじめとする温室効果ガスの排出量は世界全体で増え、地球温暖化が進む。北極の海水は減り、今後、夏の間は解けてなくなるとの予測も。気候変動のリスクを軽減するため、国際枠組み「パリ協定」は、気温上昇を産業革命前から1.5度にとどめる目標を掲げる。各国の対策強化に向け、11月にアゼルバイジャンで開かれる国連気候変動枠組み条約第29回締約国会議(COP29)でも議論される。

50年までに1度消滅も

◇既に1度上昇
国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が2021と23年に公表した報告書によると、20世紀以降、世界のCO₂排出は大幅に増え、世界の年間平均気温は既に産業革命前から約1.1度上昇。23年の世界の平均気温

は1891年の統計開始以降一番高くなった。

報告書は、北極の永久凍土融解や積雪量の減少も進むと指摘。夏季の海水は、50年までに少なくとも1回は実質的に消失する可能性が高いとした。

東京大気海洋研究所の吉

森正和准教授によると、北極は温暖化の影響を特に受けやすく、気温は地球平均の数倍のスピードで上昇。人工衛星の観測データなどによれば、海水は通年で縮小している。吉森氏は海面上昇を念頭に「北極の変化は、さまざまな形で北極外にも影響し得る。

中緯度の日本に住むわれわれも、北極に住む人と同じ緊張感で見守りたい」と指摘。「北極の急激な変化は温暖化に付随しており、地球規模で対応を考える必要がある」と強調する。



COP28の会場＝2023年12月、ドバイ(AFP時事)



COP28の会場で大規模デモを行う環境NGOなどのメンバーら＝2023年12月、ドバイ(時事)

温暖化対策